2012
vol.19
Aug

黄河の森
KFG

発　　行／特定非営利活動法人
黄河の森緑化ネットワーク
常務理事・事務局長／矢 野 正 行
編集責任者／小 川 良 太

〒650-0011
神戸市中央区下山手通り2丁目12-11
神戸華僑会館内
TEL・FAX:078-392-8328
E-mail:kouganomori@s6.dion.ne.jp
URL.http://www.k3.dion.ne.jp/~kougakfg
IP:05031111874

活動の環の広がりを目指して・新グループの参加

ああ あの大河 太古より 流れる誇り
ああ その緑 永久に たやさぬ心
燃えたつ生命 ここに ここに

CONTENTS

P.2　蘭州・中日友好林第1期と第2期環境緑化建設工程の概要
P.3　植樹活動の輪の広がりを目指して
P.3　蘭州市緑化支援活動10周年を迎え記念事業の開催
P.4　庭木の健康診断８　－庭木の施肥と散水－
P.4　絵本からのエコ・メッセージ15
P.5　黄土高原の植物18
P.6　平成24年度『黄河の森緑化ネットワーク』総会
P.6　第１回 ＫＦＧ歴史散歩を開催して

中日協働事業の10年　日本の特定非営利法人黄河の森緑化ネットワーク無償資金援助による

蘭州・中日友好林第１期と第２期環境緑化建設工程の概要

昨年の９月の植林ツアーで蘭州市を訪れた折、日中協働事業が開始されて以来１０年を迎えるに当たって、ＫＦＧ会員へのメッセージを依頼したところ下記の報告が蘭州市緑化指揮部より寄せられましたので掲載します。

日本の非営利活動法人黄河の森緑化ネットワークは日本人と在日華僑の環境保護を願う人々が共同で成立させた環境保護組織で、2003年12月に正式に成立した。それは2001年10月に成立したボランティア団体の基礎の上に成立したものである。2001年に甘粛省委の管轄する計画の下、在神戸華僑と甘粛省出身留学生の柴生芳氏と日本の環境保全を願う人々の協力を通じて、中日友好林建設の合同プロジェクトが促進され、同時に本組織（ＫＦＧ）の正式成立が促された。

中国の母なる河「黄河」を一日も早く「青河」に変えると言うスローガンのもと、資金援助の地は黄河上流の蘭州市の黄土高原で荒山を緑に変える運動として展開されてきた。

2002年10月、私たち蘭州市の南北両山環境緑化工程指揮部は第１期中日友好緑化協定に調印し、５年間をかけて技術支援する52haの荒山造林プロジェクトに対して灌漑造林を完成させた。さらに2007年には、再び資金援助を行い、３年をかけて建設規模100haの第２期環境緑化プロジェクトを完成させた。2010年、最初の合意と強力な合作の基礎の上に、2011年月、建設規模24.5haの第３期生環境緑化プロジェクトが正式に調印された。当該プロジェクトの工程は現在進行中である。ここで、重点的に中日友好林第１期と第２期の建設状況の概要と総括を記すと以下の通りである。

Ⅰ．中日友好林第１期環境緑化工程建設状況

１．合意した期間

2002年10月～2007年10月

建設地点は蘭州市王家坪（市指揮部の中心育圃園）にあり、蘭州市街から24km離れている。事業面積は57.27ha。建設内容は中国側は水利施設一式、作業区の基礎設備の建設（主に道路の建設・維持）を行い、植樹事業は日本側の資金援助で行った。

２．実際の建設状況

完成した建設規模は57.27haであり、植えた各種の樹木は167,780株である。

３．資金使用状況

当該期の投資額は全部（中・日）で135.62万元（人民幣）ある。その中で、中国側投資は、主に水利施設一式と基礎設備建設に用いた。日本側の投資は整地費（植樹地）灌漑揚水電力費、病虫害防除費等である。

覆膜造林（事務局にて添付）

Ⅱ．中日友好林第2期環境緑化工程建設状況

１．合意した期間

2007年４月－2010年３月。

２．建設地点　建設規模と建設内容

建設地点は蘭州市皐蘭県老虎台で、蘭州市街から27km離れている。合意した建設規模は100ha。完成した建設規模は100.13ha。建設内容は作業区の基礎設備建設（主に道路建設と維持）、植樹作業（ビニールの覆いを含む）と技術研究。

３．実際の建設状況

(1) 作業区の仮設道路

８条の仮設道路延べ2000mを完成させた。

(2) 植樹工程

実際に完成した建設規模は100.13haである。

(3) 技術研究

「三水」造林技術（覆膜造林技術）の植樹応用試験は、植樹地斜面の傾きと樹種及び技術に照らして整合性のある試験を計画し、2007－2008年度と2008－2009年度に分けて標本数量1350穴の試験坑を掘った。試験地の総面積は約1.3ha、11次に渡る調査をした。（具体的な研究内容は徳岡先生主編の書籍を参照）。

※　注（「三水造林技術」については本誌第４・８号並びに「中国・蘭州での緑化活動の軌跡―2007年７月～2010年６月」2010年６月刊を参照ください）

※　掲載に当たっては一部省略しています。

植樹活動の環の広がりを目指して

秋ツアーへの学生参加者を募る

事務局長　矢野正行

今年初めての企画として大学と提携して現役の学生を植樹ツアーに招待することにしました。大学はＫＦＧ設立の契機となった甘粛省出身の留学生柴生芳氏の母校でもある神戸大学とし、今後の『黄河の森緑化ネットワーク』の世代引継ぎも考え、日本人学生を対象としました。募集は２名とし各人に10万円の補助金を出す予定です。

５月の中旬、神戸大学キャリアセンターに協力を依頼したところ早速に快諾を得ることができました。学内では「ボランティア支援部門」が窓口となり募集ポスターを掲示して頂き、６月12日(火)17時30分から説明会を開くこととしましたが、当日は台風の接近で大雨となり学校が休校となったため７月２日(月)に延期せざるを得なくなりました。出足からどうも多難なような気配でした。

７月２日の説明会当日は男女学生各２名が出席され、他にこの日は都合が付かないが興味があるのでぜひ詳細を知らせてほしいという女子学生が３名おられるとのことでした。

その席で今回の企画は、地球環境保護の立場から日本の若者にぜひボランティアに参加して欲しい、そして将来も環境保護活動の中心となって活躍して欲しいとの考えから発したものだとの説明をしました。最初に現在取り組んでいる植樹地の位置と、自然環境のあらましを説明しました。つぎにＫＦＧのこれまでの中国蘭州市での植樹活動の実際をスライドを交え説明しました。特に、中国内陸部の半乾燥地帯の年間降水量が日本の３分の１以下であり、このような地で植物を育成する困難さ、それに対する工夫―灌漑水の確保のため―などの話をしました。内モンゴルでは水の確保と共に季節風による地表砂の移動に対抗する工夫など、日本では想像できない植樹の実態にも話が及びました。さらに日本の普段のメディア報道では殆ど目にすることの無い内陸部の厳しい自然環境や、日本とは多いに違う生活状況も合わせて自分の目で見・直接感じて欲しいと伝えました。

もちろん仕事とボランティアの両立は難しい面はあるが、ＫＦＧが直接関わったイオンや三井物産さらには三菱ＵＦＪ信託銀行など社員に積極的にボランティアへの参加を促すと共に、同時に基金を作り我々のようなボランティア組織に資金援助するなど社会貢献を大きな柱にしている大企業が増えています。今後この流れは更に大きくなると思うので、決して社会貢献と仕事は相反するものではなく業務の一部として考えなくてはならない時期に来ていることを説明し、積極的にボランティアに参加するよう要請しました。

最後に、参加した学生には帰国後環境保護・あるいはボランティア活動をテーマとしたレポートを作成してもらうことにしており、当誌での掲載を予定しております。来年以降も、予算の許す限り学生への支援は続けて行きたいと考えています。出来れば更に募集人員を増やせないかと検討をしたいと考えています。

《蘭州市緑化支援活動10周年を迎え記念事業の開催》

●植樹ツアーと蘭州市での記念事業参加

現在黄河の森緑化ネットワークでは甘粛省蘭州市、内モンゴル自治区オトカ前旗の２か所にて緑化支援活動を行っております。本年は我々黄河の森緑化ネットワークが甘粛省蘭州市への緑化支援活動を開始して満10年の節目の年です。思えば2002年初めて蘭州の地を訪れ、見渡す限り黄砂で覆い尽くされた黄土高原を目の当たりにし、本当にこの地で緑化支援活動が出来るのかと思いを巡らせてから10年が経ちます。10年の歳月を経て、蘭州市南北両山緑化工程指揮部の協力のもと、緑化支援活動が実を結び、今では緑に覆われた山々が連なる風景に変わりました。第１期植樹地には立派な緑化活動を展示する記念館が建ち、食事や休憩が出来る施設も整備されました。これも会員の皆様のご支援と緑化事業に対する熱い思いが南北両山緑化工程指揮部を動かした賜物だと思っております。

このように本年は『黄河の森緑化ネットワーク』にとりまして蘭州市での緑化支援10年目の節目でありますと共に、日本と中国の間では国交回復40周年の記念すべき年に当っております。『黄河の森緑化ネットワーク』としては、今年９月20日に蘭州市で蘭州市南北両山緑化工程指揮部と共催で記念式典を開催することにし、ツアーでは蘭州での記念植樹と記念式典に参加する計画としました。そしてこの10年間に植えたコノテガシワを始めとする木々の成長した姿を確認する予定です。

また、現在内モンゴル自治区オトカ前旗で進めている日中緑化基金の支援による緑化支援地も訪問し植樹をする予定です。

その後は、革命前の町並みと近年の目覚しい経済発展をした都市としての顔を持つ中国東北地区の２大都市の大連市と瀋陽市を訪れます。

主な日程　９月17日　関西国際空港出発
９月18日　オトカ前旗にて
植樹ワーキング
９月20日　蘭州市にて
植樹ワーキング・記念式典参加
９月21～23日　瀋陽・大連
９月24日　関西国際空港着
旅行の詳細は別案内書をお送りしております。

お問い合わせ先　(株)神戸華聯旅行社　☎078-391-5185

●国内事業

「国内では緑化事業」と「ボランティア活動」のテーマで講演会の開催を予定しています。この講演会には蘭州市南北両山環境緑化工程指揮部からも２名の参加が決まっております。

日時　平成24年11月３日　午後１時より４時まで
会場　「中華会館」７階　東亜ホール
詳細は別紙ご案内します。
＊講演会の後はレセプションを予定しております。

私と環境(17) 庭木の健康診断 ⑧

樹木環境研究会議「ミルフィーユの会」
天野孝之

── 庭木の施肥と散水 ──

「庭木に施肥と散水は必要か。」と問われると、健全で元気に育っている庭木には基本的には不必要です。庭木にとって土壌条件がよければ、元気な根が四方八方に伸び必要な水と水に溶け込んだ養分を吸収します。また庭木に適した土壌であれば、庭木が要求する養分や水分は充分に持っています。ただ整枝剪定や充分な刈り込みなど丁寧な庭木の管理がされて、枝葉の量が抑制されている場合はある程度は必要になってきます。

一般に宅地造成された庭は、必ずしも庭木にとっては良い庭土とは限りません。庭にはきれいな化粧土と称する庭土が深さ10－20cmほどありますが、その下は堅い地山の岩がゴロゴロ出てきたり、あるいは盛土された所ではコンクリートや瓦の破片等が埋め込まれている場合が多くあります。地山の場合は庭木の根系が地下深くまで伸びられないため大きな樹冠を支えられず、風が強いと倒れるかもしれません。また埋立地では排水がよすぎて、あるいはコンクリートの灰汁が出てきたりして充分に根が生育できません。根の浅い草花や家庭菜園の野菜などでは問題が少ないかと思いますが、根が地下深いところまで伸びていく庭木にとっては少々困った庭で、庭木が弱ってきます。その現象として、葉の色が黄色くなり、葉の大きさが一回り小さくなってきます。このため庭木は毎年弱り数年後には庭木の梢端が枯れてきます。このような症状を示す庭木は、根が相当少なくなってきた状態を示しています。水分を吸収できる根は株元の太い根ではなく、その先端近くの太さ１㎜程度の細い根やその根の周辺にできている根毛がその働きを行います。真夏の暑い日中は、庭木は葉から水分を蒸散させて、葉の温度を気化熱で一生懸命下げていますが、下から上がってくる水分、すなわち根が吸収する水分が少なくなってくると、葉の周辺から枯れこんできます。この現象を「葉焼け」あるいは「日焼け」と呼びます。

夏の乾燥による葉枯れ（ハナミズキ）
根が十分発達しないため、葉に必要量の水分が供給されない。このため葉枯れ症状が発生する。

樹体を維持する栄養分の製造即ち光合成は、根から吸い上げた水分や養分と、葉にある葉緑素との共同作業でおこなっています。健全な根が少ないと養分を含んだ水分の吸い上げ量が少なくなります。また葉が小さくなり、葉の色が薄くなることは「葉緑素」の量が少なくなることです。これらのことから庭木を養う栄養分が充分に生産されず、庭木はだんだんと弱って梢端が枯れ、枝枯れを起こし最終的には庭木全体が枯れてしまいます。健全な庭木を維持するためには健全な根を確保する必要があります。このためには健全な根が生育できる庭土が必要になります。一度皆さんの庭土を掘り返してみてください。掘る深さは根が伸びているところ、深さ60cm程掘ってください。肥料成分の多い畑と同じような色をした土が出てきますか。たくさんのミミズも出てきますか。ミミズが住めないような庭土は庭木にとっても困った庭土です。ミミズが住めるような庭土に改良しましょう。掘り上げた土に完熟発酵牛糞(または馬糞)堆肥と木炭(または竹炭)を容積比で１：１：１の割合でよく混ぜて、穴に埋め戻してください。そのあと木(竹)酢液を充分散水してください。このような穴を多く掘ると、散水の必要がない、排水性、保水性のよい庭木にやさしい庭土になるでしょう。

絵本からのエコ・メッセージ 15 「風の島へようこそ」

ＫＦＧ会員　畑中弘子
(児童文学者)

１５年前、デンマークの小さな島、サムス島で、島でつかうエネルギーをすべて自分たちでつくりだす計画がはじまりました。リーダーはこの島で生まれ育ったソーレン・ハーマンセンさん。石油や石炭や、そして原子力にたよらない自然のエネルギー、風車をつかって、島全体の電力をまかなうというのです。

絵本「風の島へようこそ」は、この夢のような話が実現していく課程を、実話をもとに描かれています。

はじめはなかなか思うようにいかなかった自然エネルギーの活用でしたが、ハーマンセンさんは根気よくいろいろな人に呼びかけます。

そんな折、大雪のせいで島中が停電になります。ところが、ハーマンセンさんたちの風車はまわり、電気をおこし続けていました。

やがて、理解者があらわれはじめ、それぞれが工夫し、とうとう自然エネルギーによる１００％自給の島となったのです。

多くの頁に、三コマ漫画のような小さい場面の絵がぎっしり描かれています。たくさんのことを知って欲しい作家の意図を感じたことです。

解説に、「ソーレン・ハーマンセンとサムス島の人々の経験には、原発事故後の日本人が学ぶべき多くのことがある」と記されていました。

アラン　ドラモンド：作
まつむら　ゆりこ：訳
福音館書店

黄土高原の植物⑱

フルス村から延安まで続くペキンヤナギの頭木樹形

ＫＦＧ顧問　徳 岡 正 三（元高知大学農学部教授）

フルス村は2011年から緑化協力を始めた内モンゴルのオトカ前旗にある村である。ここにはたくさんのペキンヤナギ（中国名は旱柳＝ハン・リュウ）が植えられている。フルス村から東南方向に陝西省の延安までバスで移動したとき、沿道には頭木樹形のペキンヤナギが各所で見られた。もともとペキンヤナギは陝西方面からフルス村へ導入されたようなので、延安に通じる沿線で見られても不思議ではないが、黄土高原の一角である延安でも同じ頭木樹形が見られたのは、筆者にとって新しい発見であった。

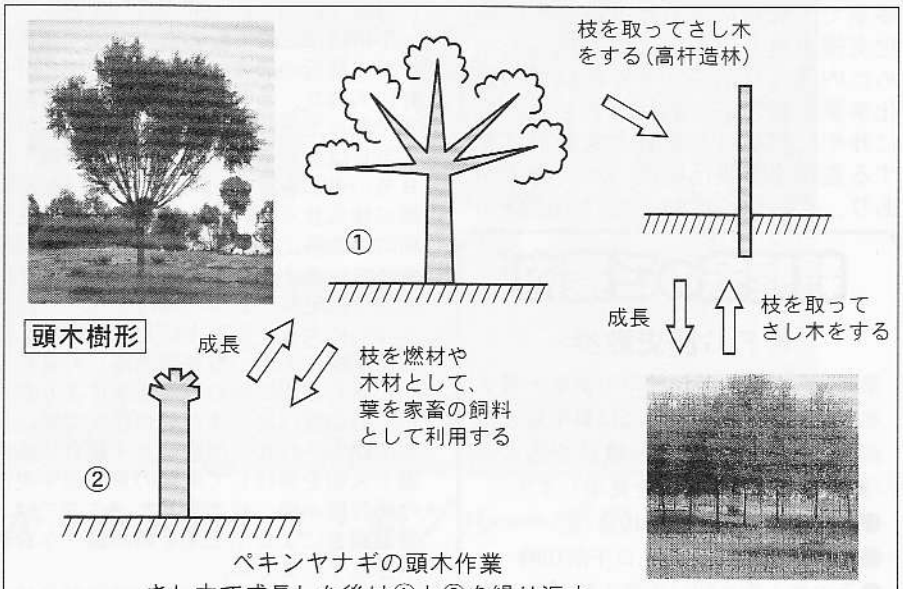
牧畜を主とするフルス村などでは、ペキンヤナギの葉を飼料に使っている。その飼料を得るための育て方が頭木作業と言われる。図のように、まず葉を切り除いた長さ３，４ｍほどの枝を取って来てさし木をする（これを高杆造林と言う）。こんな大きな枝でも容易に根や枝葉を出し、やがて一人前の木になる。そうなると、２，３ｍほどの高さのところで幹をばっさりと切断する。すると、幹の切られたところからたくさん新しい枝葉が成長する。適当に成長したのを見計らって、これらの枝葉を切り取る。葉は家畜の飼料として、枝は燃材や木材として利用する。２，３ｍほどの高さのところで幹を切るのは、新しく出る枝葉が十分成長するまで、家畜に食べられないようにするためである。枝葉の採取前は写真のような樹形になる。これが頭木樹形である。こうした作業が繰り返し行われているペキンヤナギの集団は「空中牧場」と呼ばれる。ついでながら、樹形が、あの食事に出てくるマントウ（饅頭）と似ているので頭木の名がついたそうだ。

清朝の大臣であった左宗棠が新疆に赴任していた14年間に、陝西の潼関から甘粛全土を経て新疆のハミに至る2000kmの幹線道路を改修し、合わせて道路の傍らにペキンヤナギを約52万株植え、これを記念して後の人がこのヤナギを「左公柳」と呼んだそうだ。そこで、ペキンヤナギには左公柳の俗称がある。

ということで、蘭州でもペキンヤナギが育っている。身近には五泉山公園に大きなのがある。もしこれを左宗棠が植えたとすれば樹齢は130年ほどになる。黄河の川岸にもあるそうで、とにかくどこかで左公柳という名札を見つけたら、それがペキンヤナギである。

フルス村から延安に向かうとき、明代の万里の長城を越える。だいたい長城を越えると砂丘のあるオルドス高原から黄土高原に入る。この両方の高原にペキンヤナギが育っているわけだが、蘭州のＫＦＧの緑化支援地のような丘陵では育たないだろう。ヤナギはやはりある程度水がないと成長はむずかしい。適地に適木これが原則である。ペキンヤナギが育っていれば、そこの地下水位は高いと想像できる。

ところで、西域を踏査した大谷探検隊の記録写真に頭木樹形らしい姿の木が写っている。頭木作業は一種の萌芽更新なので、萌芽できる（切り株から新しく枝葉が出る）木があれば、広くあちこちで行われていても不思議ではないのかもしれない。



ペキンヤナギの頭木作業
さし木で成長した後は①と②を繰り返す

六甲山クリーン＆グリーン活動

六甲山植樹 －住吉山手9期植樹－

- ●平成24年９月８日（土）下草刈り（雨天順延）
  平成25年３月９日（土）予定　９期植樹及び補食
- ●集　合　JR住吉駅南側広場　９時
- ●服　装　長袖、帽子、運動靴
- ●持参品　弁当、飲み水、軍手、雨具、タオル

参加できる方は事務局までお知らせ下さい

六甲山クリーンアップ活動

－身近にできることから始めよう－

- ●日　時　平成24年９月29日（土）
- ●集　合　阪急岡本駅　９時
- ●歩　行　約３時間
- ●コース　ごみ、空缶集めをした後、住吉山手の記念植樹地で春は花見、秋は栗拾い。
- ●持参品　弁当、水筒、雨具、タオル、ごみ入れ用ビニール袋、軍手

＊クリーンアップ活動後、関帝廟での賞月会に合流します。

＊最近は参加される方が固定化しています。新しい方の参加をお待ちしています。９月の下草刈には三菱UFJ信託銀行神戸支店の方も参加される予定です。

平成24年度「黄河の森緑化ネットワーク」総会

秋に日・中両国で蘭州協働植樹事業10周年記念行事開催を承認

事務局長
矢野正行

特定非営利活動法人「黄河の森緑化ネットワーク」（ＫＦＧ）の第９回通常総会を５月26Ｈ（土）13時30分から中華会館７階東亜ホールにて開催しました。最初に議長の選出と出席会員数の確認をし、出席・委任状提出者併せて131名で成立した事が報告されました。現在、定款に基づく正会員数は228名となっており昨年に比べ７名の減少となっています。

議事に先立ち、石嘉成代表理事から「今年は蘭州での植樹支援開始10周年であり秋に神戸でシンポジュームを計画しているので、皆様のご協力をぜひお願いしたい。また緑化は10年20年で達成できるものではないので子供や孫に引継ぎ、今後も何世代にも渡って続けていかなければならない」との挨拶がありました。

引き続き議案の審議に入りました。第１号議案では、昨年度の事業報告並びに会計報告がされました。主な事業では蘭州市における第３期の緑化支援事業と、新たに取り組みを始めた内蒙古自治区オトカ前旗での緑化事業の報告が行われたました。次に昨年に起こった東日本大震災に対する義捐金募集活動について説明があり、この取組に対しては中国蘭州市南北両山環境緑化工程指揮部からも義捐金の拠出の申し出があり、合わせて兵庫県義捐金募集委員会に寄付を行ったことが報告されました。続いて平成23年度決算、監査結果が報告され了承されました。第２号議案では蘭州での緑化事業開始１０周年を記念する事業が紹介され、また内モンゴルオトカでの２年目の砂漠化土地緑化事業等を含む平成24年度の事業計画と収支予算が説明され満場一致で了承されました。第３号議案の役員改選は今年が二年毎の改選期に当たっており、これについても満場一致で承認されました。

講演とインド舞踏

総会終了後には、植物学研究者で「人と森の研究室」の主宰者である松下まり子氏による「花粉（化石）でわかる森の歴史」と題して講演をいただきました。花粉は地中に堆積しても長く残るため、それを分析することにより埋没した当時の植生が推定できるとのことです。この手法によりその地域の植生の変遷、あるいは古代遺跡の人々が暮らしていた環境の推定もできるようです。続いてモガリ真奈美氏によるインド南部に伝わる古典舞踊を披露して頂きました。その後の懇親会は場所を三宮「陶玄居」に移し、約30名が参加して有意義で楽しい時間を過ごしました。今後もどんどんこの輪を広げ『黄河の森』を盛り上げて行きたいと思っております。

親睦会のご案内

ＫＦＧ歴史散歩

第二回の歴史散歩は神戸市垂水・舞子地域を歩きます。当地には県下最大の前方後円墳「五色塚古墳」や幕末の「舞子浜砲台」跡などを見学します。

●日時：平成24年11月10日（土）
●集合：JR 舞子駅改札口午前10時
●その他：垂水駅に午後１時着を予定。
※お問い合わせは事務局まで。
（fax・メールにてお願いします。）

松茸狩り

今年もまた丹波市山南町の会員村上鷹夫さん，三角修一さんのお世話により松茸狩りとすき焼鍋を囲んでの親睦会を開催します。

親睦会と宿泊も三角さん経営の民宿で格安料金でお願いしています。

●日時　平成24年10月13日（土）14日（日）
●集合　平成24年10月13日（土）13時30分
篠山口駅西側ロータリー
●費用　一泊２食（約13000円、
松茸山入山料含む）
＊篠山口までの交通費および飲み代は個人負担

第１回 ＫＦＧ歴史散歩を開催して

去る３月31日会員間の交流事業の一つとして歴史散歩を開催しました。当面はＫＦＧの拠点である神戸市内の遺跡・史跡を訪ねて歩くことにし、第１回は現在ＮＨＫで放映中の大河ドラマに因み「平家」関連遺跡を巡ることにしました。

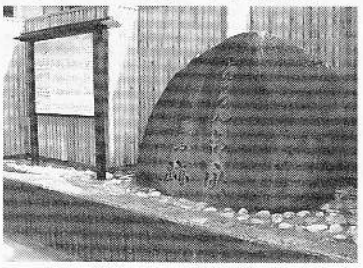
平清盛はこれまでの歴史では「判官贔屓」に対する敵役でイメージされていますが、最近の研究では当時の中国（宋）を中心とするアジアの国際関係・交易を視野に入れた、当時としては稀有の合理的かつスケールの大きな構想を持った為政者であったと評価されるようになっています。

当日は前日来の風雨が朝方まで残っていたため、予定より少なくなりましたが８名の参加を得て出発しました。最初に向かったのは清盛以下の平氏一族の邸宅群が建ち並んでいたといわれる兵庫区荒田・平野町です。ここでは神戸大学付属病院の改築工事により、敷地内では当時の邸宅跡や大規模な堀の跡が次々と発見されています。この２ヶ月前までは平野町の一角では発掘調査が行われていて、大きな邸宅跡と日本では博多以外では出土していない「玳皮天目」が発見されマスコミに大きく取り上げられていました。その後清盛の邸宅跡といわれる市立湊山小学校にある「雪見御所跡」の石碑を見て兵庫津へ移動しました。

こちらは震災後の再建工事により奈良・平安時代の遺跡が一部姿を現しましたが、その姿はまだまだ謎の状況です。後の鎌倉時代以降になって清盛の供養のために建立された「清盛塚」・鎌倉仏教の一つ「時宗」の大壇林である真光寺の一遍上人廟を参拝して最後の見学地中央市場前の特設展示場へ行きました。ここでは一連の発掘調査による出土品を始め様々な資料が展示されていました。

現状は、清盛時代の邸宅跡は部分的に姿を現し始めましたが、当時の港についてはその位置さえ推定の域を出ない状況です。これからも発掘調査のニュースのたびに想像を巡らす楽しみは続きそうです。

次回は神戸市垂水・舞子を歩く予定です。


雪見御所跡の碑

会報18号の『念願のシルクロードの旅と植樹』の笠井正康様のお名前を誤記していましたお詫び申し上げます。（小川）